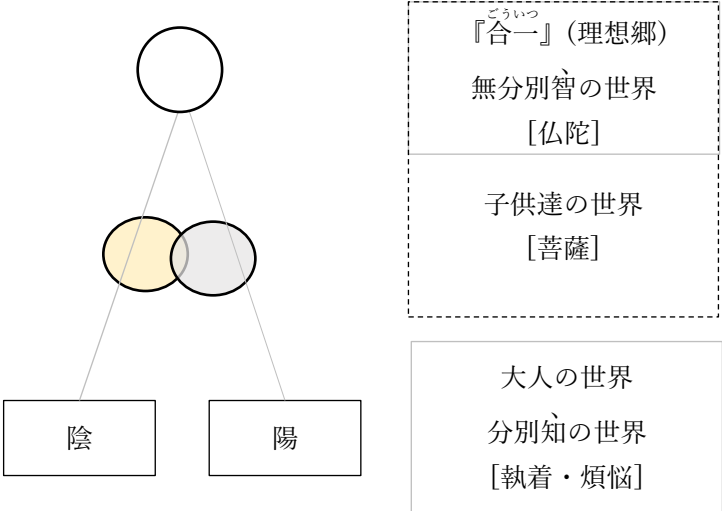


1. 子供達の純真な感性

私は第3回目の「四国へんろ」——正味 2017(平成 29)年 4 月 4 日(火)～5 月 14 日(日) の 40 連泊 41 日間、22 日目 4 月 25 日(火)のこと、高知県大月町^{つきやま}の月山神社手前の遍路道（山道）には、地元大月小学校の学童が描いた歩き遍路に対する激励メッセージが沢山木々にぶら下げられていた。

四国遍路は、四国 88 の寺院（札所と呼ぶお寺）を巡拝するが、図-39a のとおり、高橋さんの絵柄には、鳥居の形が大きく描かれている。この他に何人も同様の鳥居を描いていた。子供達のイメージとしては、巡拝の対象が神社という錯誤では無く、神様のような何か偉大なものを拝んでいるということだろう！ 子供達には、寺とか神社とかの区別は無く、とにかく何か神秘的で偉大なもの、というイメージだろう。寺のマークの卍を書いている人は誰もいなかった。

	
図-39a	図-39b

ここで、「陰陽二元」と「無分別智と分別知」の視点を持ち寄る、図-39b と組み合わせて見る。子供達が寺と神社の区別を意識しないということは、「寺院＝神社」という等式を成立させているのである。

すなわち無分別智（禅でいう平等界と差別界^{しゃべつ}が融合した理想境地、純粹無垢の精神世界）の世界により近いのである。子供達の感性に脱帽する、大人になってもこのような感性が大事であると思う。私自身、実際に寺の本殿と大師堂の前で読経している時に、寺であるという区別は特に意識はしない。私は本堂・大師堂の前で、無意識のうちに弾みで時々拍手を打った。時には「^{かしわで}祓 ^{はらえことば}詞」を唱えた。

そもそも吾が国家、^{やまと・だいわ}(※)大和民族には、元来^{かみ・ほとけ}神仏を区別しない大らかな善き習性が等しく備^(しん・ぶつ)

わっているのだ。ここでいう大和民族^(※)とは、^{やまと}大和国家に対応した現在の奈良県や大阪府の地域を中心とした当時の地域住民のことではなく、本居宣長（江戸時代の国学者）が読んだ有名な和歌「敷島の和心を人間はば 朝日に匂ふ山桜花」で表される日本民族を指す。

このような神仏混交の思想（シンクレティズム）を多様性、包容性、重層性、多層性等と表現されている。このような日本精神の基層に沁み込んだ思想を後押しする四つを取り上げる。

- ✓ 1 仏教は欽明天皇の時代、朝鮮半島の百済から朝廷に対し仏像・経論が贈られたことに始まる（538年説と552年説、前者が有力）が、八百万の神・天神地祇の信仰（アニミズム）に根差していた当時の人達は、「**仏は蕃神（あだしくにのかみ）**」と称し、**仏は外国の神**として理解したというのである。
- ✓ 2 江戸時代の国学者・本居宣長は、日本の神観念を「**可畏^{かしこ}き物^{かみ}を迎^も微^ととは云うなり**」（古事記伝）と定義付けた。「可畏^{かしこ}き物^{かみ}」とは畏怖^{いふ}すべきもの、という意味であり、尊いもの、善いもの、功績を齎すものだけでなく、荒くれる悪いもの、不思議な威力を発揮するものなど、とにもかくにも尋常ではない人智を超えた人間には計り知れない偉大な力を及ぼすものを指す。

二人の和歌を取り上げる、私の解釈で記述する。

- ✓ 3 西行——俗名は佐藤^{のりきよ}義清、鳥羽法皇に仕えた北面の武士、23歳の若さで出家した僧侶の身分で伊勢神宮を参拝し「**なにごとのおはしますかは知らねども かたじけなさに涙こぼるる**」と詠んだ。⇒ 祀っているのは天照大御神とかいい究極至高の神様であろうが、神様の序列・優劣に関心がある訳ではない、言語では表現できぬ至純の神々しさを感じる、私は仏教帰依（天台宗から真言宗へ？）の僧侶ではあるが、ここに来たら宗教宗派の何たるやは関係ない、ただただ有り難いという思いから手を合わせ首を垂れる、訳も無く涙がこぼれるのみなのだ。
- ✓ 4 貞明皇后^{ていめい}（大正天皇の皇后）は「**キリストも釈迦も孔子も敬^{うやま}ひて 拝^{おろが}む神の道^とぞたふとき**」と詠んだ。⇒ 日本人は外国から入って来たキリスト様・お釈迦様（仏）様・儒家聖賢の孔子様も客神と言って大事に受け入れ、仲良く共存共栄の世界を広めて来た。その違いを意に介せず皆を平らかに受け入れて来た精神は誠に大らかである。だから、家庭の中に神棚と仏壇を併存して祀り、子供が産まれると神社のお宮参りに、キリスト教会で結婚式を挙げても、亡くなれば寺のお世話になる。当人のみならず親戚や知人・友人も礼儀を尽くして参列する。現世利益があるとかないとか、違いをことさら強調しない。日本人は全知全能のただ一つの神のみが存在する一神教世界ではないのだ。個性を持った八百万の神々と十方諸仏が仲良く暮らす国なのである。

そのような心中は、神・仏・キに区分けを入れていない、境界線を入れようがないのだという「阿頼^{あら}耶識^{やしき}」からの疼^{うず}きであり、私の思いとぴったり一致する、琴線に触れた思いがする。

他方で、前記のような子供達の感性を見て、想像するに、一部の僧職は “お寺と神社の混同は分かっ
ておらん！”、一部の神職は “葬式仏教（葬儀事業）のお寺と、神聖な神社・鳥居と混同するのは学校

の教育がなっとらん！”と偉そうにほざく『桎梏ア縫自』——足かせ・手かせの中で自分を袋状に縫っている状態、つまり、監獄個室に入って身動きが取れない状態、あるいは、『ネット包囲リング内一人相撲』——内鍵を掛けて、その鍵もどこに置いたのかすっかり失念状態、どちらにしても思考回路が金縛りになっている、しかも自縄自縛を認識出来ないでいる状況が見えて来る。

大月小学校の子供達にはすでに  1 ・  2 ・  3 ・  4 の精神が融合されて深く刻まれているのである。何と素晴らしいことではないか。

大月小学校の子供達に習い、これを教育の教材にすべきである。崇高な教職・聖職たる公僕の責務を忘れがちな教師の再教育素材にすべきである。はたまた、大人の生涯学習の素材にすべきである。

(end)